

7月も半ばとなりました。京都は祇園祭の季節、梅雨明けも間近です。幼稚園のお泊まり保育、教会は来週の夏期学校を皮切りに、バイブルキャンプ、夏期聖会と、夏の恵みの波がやってきます。準備に追われる日々ですが、制限なく開催できる今年の夏に感謝したいと思います。

弟子の目になるな

ルカ 21 章の舞台は、エルサレム神殿です。初めて京都にきた観光客は、金閣寺に清水寺、国宝、重要文化財がごろごろしているこの都に目移りすることでしょう。ガリラヤの弟子たちも、見事な神殿の大きさとその荘厳さに、すっかり圧倒されました。しかしイエス様は、「あなたがたはこれらの物に見惚れているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る」と言われました。そしてその预言通り、70 年後にローマ帝国が神殿を破壊し、現在は「嘆きの壁」となっています。

私たちは、目の前のことに圧倒されたり、夢中になったりしまいます。しかし、本質を見抜く主の言葉を忘れてはいけません。全てのことは過ぎ去っていくのです。

主の目を見よ

主のまなざしは、同じ神殿の中の、全く異なる世界に向けられていました。それは貧しいやもめが、全財産、と言っても 50 円玉二枚くらいの値段ですが、を献金している姿でした。全世界の救い主が、一体どうしてそこまでその女性に心を留めたのでしょうか。それは、イエス様ご自身が背負われている使命に、やもめの姿がぴったり重なったからではないでしょうか。二日後に、イエス様は敵対者の手に引き渡され、三日後には、十字架刑で殺されました。この犠牲は、何の痛みも伴わない、余裕の行為ではなく、ご自身の全存在をかけて挑まれた、恥と苦しみを飲み干される御業だったのです。イエス様には、彼女の思いが、手に取るように伝わってきて、その本質をあらわされたのです。

私の目は何を見ているか

人混みの中で、不思議と目に留まる人がいます。それは、その人が目立つからでしょうか。母親は、自分の子どもをすぐに見つけます。恋人は、遠くにいてもその人がすぐ分かります。自分の心が求めているものを、人はキャッチするのです。弟子の目はこの世の繁栄を、イエス様は神の愛を、同じ神殿で目に留めました。

私たちは、何を見ているのでしょうか。自分が目に留まることをチェックしてみましょう。それが、あなたの心が求めているものなのかもしれません。もしも、滅びゆくものに心奪われているとしたら、それはイエス様とは同じ思いではありません。神の愛は、目立たなくても私たちのすぐ近くにあり、決して滅びることはないのです。